法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

苦力帽 : 1840年～1940年の中国人強制移住労働者の帽子をめぐる考察

杉浦, 未樹 / SUGIURA, Miki

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
89
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
77
(終了ページ / End Page)
106
(発行年 / Year)
2022-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025197

苦力帽
―1840年～1940年の中国人強制移住労働者の帽子をめぐる考察―

杉　浦　未　樹

要旨

中国人苦力は契約労働者として1840～1940年の間に両アメリカ大陸，東南アジア，南アフリカ，オセアニア，中国国内へ移動し肉体労働に従事した。各地に共通した表象となったのが労働者たちのかぶったつば広の麦わら帽子,「苦力帽」であった。本論文は，この苦力帽のグローバルな流通と着用の諸相を，北米への航路と大陸横断鉄道の労働地や，英領マラヤの都市社会や，第一次世界大戦時のヨーロッパの中国人労働隊をはじめとした複数の地域での展開からみていく。そこから苦力帽の生産や流通は東アジアにおける製帽業の拡大と密接に結びついていたものである一方で，中国や東南アジアにおける苦力に対する社会的な区別や差別が消費動向に影響を与えたことを示す。

はじめに

中国人苦力は，1842年～1930年代に集中して起こった大規模な契約労働者の集団移動である。正確な統計はないが，その数は中国から南北アメリカ，東南アジア方面だけを考えても，少なくとも500万人から1000万人と見積もられ，１世紀分としては大西洋奴隷に匹敵するか上回る国際労働移

動であるといえる。さらに日本が主体となって1905年～1942年に満州に動員させた「苦力」数は2000万人と見積もられている。その間，派遣された地域も，両アメリカ大陸，カリブ海域，オーストラリア，南アフリカ，東南アジア，中国本土と広範囲である。屋外の不熟練の肉体労働が特徴で，各地で鉱山・鉄道建設・戦役・農園労働，荷役に従事した[1)]。

もっとも，中国人移民の合計数は同時期のインド人移民の約三分の一と推測され，中国人苦力数も，インドのそれを下回ったと考えられる[2)]。この理由は，1870から80年代を境に北米への中国系移民が制限され，また南米やカリブ海への集団派遣が終わったことに求められる。しかし中国苦力の派遣は続き，その後は東南アジアが主要な行先地となり，1930年代後半以降は日本の侵略によって満州苦力，すなわち北東中国への移動が中心となる。インド人苦力との相違は，このように移住先が明確にシフトしたことと，苦力交易と移動の采配にかかわった地域（植民地支配国）が，イギリスだけでなく，フランス，アメリカ，ポルトガル，スペイン，オランダ，日本，ドイツ，中国と多様であった点である[3)]。

中国人苦力は，奴隷と並んで強制労働（Forced Labor）に分類されるが，奉公契約が結ばれ報酬も発生する契約労働（Indentured Labor）である。一方，強制移住（Forced Migration）であるかという点では，苦力には経済的動機が伴うため，難民や捕虜や政府に命ぜられた強制移住者とは峻別される。しかし，人身売買や不法移動が高い割合で含まれるため，非自発的であり，強制性の強いと位置付けられる。強制移住の議論のなかでは奴隷や契約労働者をどう位置付けるかは，大きな論点となっており，そもそも

1）同時期の女性の強制移住労働は猪花と呼ばれ苦力とは区別される。可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』．岩波書店，1979.

2）1834～1937年のインド系移民は3000万人と推計される。もっとも表1に示されるマッキオンのように，東北アジア内の移動を含めると，インド人を上回る数ともなりえる。McKeown, Adam. “Global Migration, 1846-1940.” *Journal of World History* (2004): 155-189.

3）Yun, Lisa. *The coolie speaks: Chinese indentured laborers and African slaves in Cuba*. Temple University Press, 2008, p.8

移民を国内―国外，任意―強制というように二項対立的に扱うことを問題視する主因ともなっている[4)]。

中国人苦力に関する先行研究は，1970年代以降一時期あまり進展がみられなかった[5)]。しかし，2000年代後半から移民史研究における重要性を高めている。いまだ苦力の移住先ごとに研究が分かれ，太平洋側（北米・南米・ハワイなど）の研究の比重が高い[6)]。アジア側では日本植民地下の満州の苦力活用の研究が進展し，他に日本人研究者を中心に，苦力供給者としての中国側―香港やアモイの苦力交易の実態―の研究がある[7)]。中国人苦力の最大の吸収先であった東南アジアの研究は中国系移民研究に包摂され，個別研究は少ない[8)]。

しかし，2010年以降は，苦力を地域をわけずにつなげて扱おうとする研究が増えつつある。特に重要であるのが，中国国内の大移動につなげようとする研究が進展したことである[9)]。こうした研究が増えた背景には，McKeon（2004）が1870年～1930年のグローバルな移動が活性化した時期において，北東アジア内の移動は，アメリカへの移動に匹敵する規模であ

4）O'Connell Davidson, Julia. "Troubling freedom: Migration, debt, and modern slavery." *Migration studies* 1.2 (2013): 176-195.

5）Stewart, Watt, *Chinese bondage in Peru : a history of the Chinese coolie in Peru, 1849-1874* Greenwood: 1970; Moses, John A. "The coolie labour question and German colonial policy in Samoa, 1900–1914." *The Journal of Pacific History* 8.1 (1973): 101-124)

6）Meagher, A. J. (2008). *The Coolie trade: the traffic in Chinese laborers to Latin America 1847-1874* ; Jung, Moon-Ho. *Coolies and cane: race, labor, and sugar in the age of emancipation*. JHU Press, 2006 ; Narvaez, Benjamin Nicolas. *Chinese coolies in Cuba and Peru: race, labor, and immigration, 1839-1886*. The University of Texas at Austin, 2010.

7）Driscoll, M. (2010). *Absolute Erotic, Absolute Grotesque*. Durham, Duke University Press.可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』，村上衛. "一九世紀中葉廈門における苦力貿易の盛衰." 史学雑誌 118.12 (2009): 2069-2105.

8）Arensmeyer, Elliott C. "The Chinese Coolie Labor Trade and the Philippines: An Inquiry." *Philippine Studies* (1980): 187-198.

9）Lynteris, Christos. "Skilled Natives, Inept Coolies: Marmot Hunting and the Great Manchurian Pneumonic Plague (1910–1911)." *History and Anthropology* 24.3 (2013): 303-321; Gottschang, Thomas R., and Diana Lary. *Swallows and settlers: The great migration from North China to Manchuria*. University of Michigan Press, 2020.

り，むしろ20世紀前半にアメリカへの移動が縮小しだしたあとは，これを凌駕したと指摘したことがある[10]。移民史研究では，こうして，1870〜1930年には両アメリカ大陸，東南アジア，北東アジアが３つ巴の形をとって移動が活性化されたと，アメリカへの移動を中心とする見方を是正しつつある。その中で，中国人苦力の移動はこの３つの動きすべてに関係する注目すべきものといえる。

経済史の視点から苦力（インド人苦力も含めて）をばらばらでなく集合的に扱うことを促してきたのが，ステープル理論であった。ステープル理論とは，農作物の性質が労働形態を決めるというもので，労働集約的な綿花やサトウキビ，タバコは，奴隷労働や強制労働が強く結びつくとする[11]。この理論は，苦力が奴隷の代替や延長であるとみなし，農作物の性質の共通性から異なる地域の中国人苦力も「共通した存在」になるという見方を助長している。しかし，近年，中国人苦力研究は，苦力が「奴隷の代替」や「新奴隷」であるかについては慎重である[12]。

苦力の語は，タミル語由来であり，インド系労働者に使われていたものが中国人労働者に使われるという越境的なエテイモロジーをもち，歴史的に定義が変容してきた[13]。ムーンホジュン は，（中国人）苦力は決して人々（集団）や法的な分類ではなく，様々な想定下の人種的なイメージが寄せ集まったもので，想像者が作り出したものと述べる[14]。中国人苦力は，出向地が分散し，互いに連携していなかった。それにもかかわらず，苦力とい

10）McKeown, Adam. “Global Migration, 1846-1940.” *Journal of World History* (2004): 155-189

11）Goldin, C. and Sokoloff, K. (1984). The relative productivity hypothesis of industrialization: The American case, 1820 to 1850, *Quarterly Journal of Economics* 99(3): 461–487 Droller, Federico, and Martin Fiszbein. *Staple Products, Linkages, and Development: Evidence from Argentina*. No. w25992. National Bureau of Economic Research, 2019. Choy, Keen Meng, and Ichiro Sugimoto. “Trade, the Staple Theory of Growth, and Fluctuations in Colonial S ingapore, 1900–39.” *Australian Economic History Review* 53.2 (2013): 121-145.

12）例えばYun, Lisa. *The coolie speaks: Chinese indentured laborers and African slaves in Cuba*. Temple University Press, 2008

13）1934年に三崎は，苦力を満州人，支那人の不熟練労働者の俗称としている。三崎 鐵之助 “滿洲に於ける滿支人勞働者” 立教大學經濟学會會誌 (13), 23-40, 1934-10

う言葉でひとくくりにされているのは，実体ではなくむしろ想像した側が生み出した，人種差別的イメージの集合体であるという主張も無理はない。

しかし，その一方で，広域に散らばった中国人苦力を，地域をまたいで統合されたイメージとするように仕向けた具体的なモノがあった。とくに取り上げられたのが，苦力の帽子である。苦力帽とは，麦・蘭草をはじめとした植物繊維を編んだ，円錐形の先端と幅広のつばが特徴的な夏のわら帽子である[15]。（図１と図２）この帽子は，今日にいたるまで，苦力帽coolie hatという言葉でファッション辞典にも登場する[16]。1840年からの一世紀の間，カリフォルニアのゴールドラッシュ，ペルー，キューバ，ハワイ，ルイジアナのプランテーション，北米やパナマやカナダの大陸横断鉄道建設現場，南アフリカの鉱山から，シンガポール，香港，上海の人力車や荷役まで，中国人苦力はその帽子とともに表象されてきた。苦力帽は，戸外の過酷な条件で，近代化から取り残され，旧弊にしがみつき，帝国主義に搾

図１　1870年代のルイジアナの砂糖プランテーションを描いたイラスト

図２　1900年服装統制前のシンガポールの人力車苦力の絵葉書

14）Jung, Moon-Ho. *Coolies and cane: race, labor, and sugar in the age of emancipation*. JHU Press, 2006, 5.

15）日本の陣笠に先端の形は似ているが，広めのつばがついている点が異なる。

16）Picken, Mary Brooks. *A dictionary of costume and fashion: Historic and modern*. Courier Corporation, 1999.

取される人々の象徴とも受け取られた。アジア風の先のとんがった帽子の形（conical hats）は，この時期以前の中近世期にすでにヨーロッパの婦人帽として取り入れられ，18世紀までにアフリカ南部のコイコイ族をはじめ，インド洋沿岸の各地に広がった。さらにスペイン，イギリス，フランス，オランダの東南アジア・南アジアの植民地軍のヘルメット型兵帽に素材や形を変えてつながるなど，数々のグローバルな交流が起こっていた[17]。しかし，中国人の強制移住労働者集団の出現によって，このタイプの帽子は，特定の社会集団を属し，その旧弊さと苦渋を示すものとして固定されたといえる。

ここで改めて，各地に散らばった中国人苦力が，一世紀もの期間にわたって同じような形の帽子によって表象されたことの意義を問い直したい。現実とは乖離した偏見のあるイメージが，支配者の異なる植民地で共有・再生され続けたと考えることには無理がある。苦力の主要な行き先は，アメリカ両大陸，東南アジア，中国本土とシフトしていった。また，アフリカ系奴隷や東インドの奴隷に比べると，苦力には地域を超えて共通するような服装規制（sumptuary law）は適用されなかった。そもそも，どのようにして，中国人苦力の多くが，似たようなタイプの帽子を被ったのであろうか。生産者は誰で，なぜ作り続けたのであろうか。

さらに，この時期，東アジアでは製帽業が大展開し，日本でも中国でも帽子消費が拡大していた。特に麦わら帽は19世紀にグローバルに生産と消費を拡大していた[18]。エクアドル産のパナマ帽が19世紀半ばに流行すると，ブラジル帽，マニラ帽，蘭領東インドのパンダン帽，竹帽などが続き，1870年には製帽ミシンの発明によってボーターがはやった[19]。中国，日本，台湾は，生産者としても，消費者としてもこのブームにかかわっていた。1870

17）Schlegel, Gustave. “Hennins or Conical lady’s hats in Asia, China and Europe.” *T’oung Pao* 3.4 (1892): 422-429.

18）Nichols, Marian J. “Straw Plaiting and the Straw Hat Industry in Britain.” *Costume* 30.1 (1996): 112–124.

年代までに清は，英米仏への麦棹の最大の輸出地域となり，1870～1938年の間に大量の帽子を輸出していた[20]。これに対し19世紀末期から日本が麦棹輸出で競合し，また，その後台湾に投資して模造パナマ帽の世界展開に力を入れた。

とくに日本社会は特に帽子の浸透度が際立っており1920年代に東京の通りを歩く男性のうち90－95%が帽子をかぶり，1930年代後半には，東京の男性は平均して６つの帽子を所有し，パナマ帽，中折れフェルト帽，ボーターがとくに普及した[21]。日本も中国も断髪をきっかけに帽子消費が大きく伸びたが，日本の断髪令が1871年だったのに対し，中国では辛亥革命後とだいぶ差がある。1912年を皮切りに，中国各地でいっせいに様々なスタイルの帽子が生まれ，日本は，模造パナマをはじめとした帽子が中国市場で売れると期待して市場進出に乗り出していた。

帽子が苦力の表象となりつづけた理由を追究するためには，東アジアにおける製帽業の展開のなかに苦力たちの帽子を位置付ける必要がある。さらに，苦力たちの帽子の着用がこの時期の展開に与えた影響も検討するべきである。中国人苦力は強制労働者として，非自発的に文化間を移動し，その移動と労働の生活のなかで，帽子を含めて，特定のものを非自発的に消費した。それでは，彼等の帽子は，「苦力以外」の人々の帽子の生産や消費に影響を与えたのか。この点を本稿では考察していく。したがって，本稿の目的は，苦力を帽子にかけ合わせる図像イメージ（いわゆる移民集団のステレオタイプイメージ）がどのように生じ，各地に派生したかを探ることではない。本稿の目的は，苦力帽の実体―中国人苦力たちが各地で実

19）Elfenbein, Jessica. “BALTIMORE’S MS LEVY AND SONS: Straw Hat Makers to the World, 1870-1960.” *Essays in Economic & Business History* 26.1 (2008): 89-102.

20）弁納才一『華中農村経済と近代化』汲古書院，2004年。

21）東京帽子協会『東京の帽子120年史』東京帽子協会，2005年，116-117. Yuko Kikuchi ; ‘Tōyō shumi’ of household products designed in Imperial Japan of Manchukuo and Taiwan; Paper Presented at UEA Sainsbury Institute workshop: ‘Tôyô shumi in Imperial Japan’, 13–14 June 2013.

際に何をかぶったのか，その帽子の着用にはどのような背景や仕組みがあったのか，また中国人苦力がそうした帽子をかぶったことが，その他の帽子生産や消費にどんな影響を与えたのか―を明らかにすることである。

いかにその強制性が曖昧であっても，強制的な移動は，そうではない人に自らを区別させようという動機を生じさせる。大西洋奴隷にたいする服装規定が，奴隷以外の服装も規定し，奢侈品と日常品の境目を決定していったように，中国人苦力も，出航地，行先地，移動に直接関連しない地域のそれぞれにおいて，ドレスコードを作り出す存在でありえた。この過程で重要なのは，この三つのタイプの地域が，ドレスコードを共有するとは限らない点である。大西洋奴隷では，無漂白や青の粗綿シャツなどが奴隷の代表的な衣とはなった。しかし，供給地，行先地それぞれ（カリブ海・北米・南米），さらに本国（英・仏・西）では，奴隷とそれ以外を区別する服装規範はかなり異なった[22)]。条件だけで考えると，中国人苦力は，奴隷以上に，三つのタイプの地域間の関連がうすく，それぞれの地域でドレスコードが異なり，またそれも頻繁に変容する素地があった[23)]。それにもかかわらず，苦力のかぶる帽子が，地域を通奏するメルクマールとなりえた。その背景を明らかにしていきたい。以下に，第一節では1840～1880年代を中心に，出航地と行先地（主に北米）を視点に，第二節は，1860～1930年の中国大陸における帽子の生産と消費の視点から，第三節は1880～1940年の中国苦力の主要な行先地，東南アジアを視点に，強制労働移住と帽子の生産と消費との関係を検討する。

22）スペイン系列，オランダ系列と，同じ本国をもつ植民地では規範が似通った程度である。

23）中国人苦力は8年程度の契約労働で，可処分収入があり，衣類の買い替えも起こりやすい。実際に，苦力をあまり雇い入れない「それ以外の」地域（英仏）では，苦力の醸し出すものをタブーとみず，刺激的で斬新な「オリエンタル」なイメージであり「苦力風ファッション」をこの期間にも作り出した。苦力帽は女性のファッション品として1870年～1930年の間に断続的に，しかし繰り返して流行する。戦間期の婦人ファッションにおける苦力帽の取り込みについては Pass, Victoria Rose. “Racial Masquerades in the Magazines: Defining White Femininity Between the Wars.” *The Journal of Modern Periodical Studies* 11.2 (2020): 270-291

Ⅰ　1840年～1870年　アメリカにわたる苦力帽

1840年から1870年代に両アメリカ大陸にわたった中国苦力の行程を再構成すると，広範な地域へ移住した苦力が同じような帽子を目的地でかぶった理由がみえてくる。渡航した苦力の出身地は福建と広東に集中し，各地に勧誘・拉致した苦力を留め置く猪子所ができたが，苦力を運ぶ外国船を清政府が歓迎しなかったために，苦力の最終的な出航地は，外国船の出入りが比較的緩い香港，マカオを筆頭とする数港に限定された。苦力たちは各地の猪子所から，最終出航地の大規模な猪子所へと連行された。猪子所での取り扱いは非人道的で，裸同然にさせられ，上半身に目的地の頭文字を塗られたという。そしてサンパンと呼ばれる小舟から太平洋をわたる大型船に乗り込んだ。一つの大型船に大体600人～1000人の苦力が乗り，乗り込むだけで二日程度かかったと記録されている。このように苦力となる労働者の行程は，勧誘された時点から乗船するまで，一般社会からは隔離されて管理された状態であった。勧誘時点で，目的地では一年に二セットの新服を約束された。目的地までの衣服は，この管理された行程のなかで帽子もまとめて提供されたと考えられる[24)]。

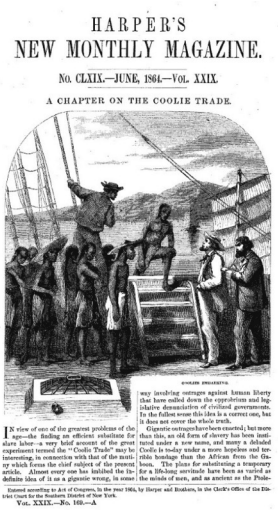
1864年のハーパーズマガジンの記事が，サンパンから母船に乗船するときの苦力の様子を次のように述べている。「苦力は上半身裸で，ルーズな「苦力ズボン」をまとい，はばひろのつばのある麦わら帽子をかぶった。腰にポーチと財布を巻いており，小さなはし箱をつけていた。乗船時に，武器やアヘンを所持していないか入念に検査された。」[25)] この記述から，出航時に苦力が，一様に，すでに「苦力衣 Coolie clothing/ Coolie trousers」と呼ばれた恰好をしており，ほとんどが帽子をかぶっており，しかも帽子がもっとも大きい所持品であったことがわかる。

苦力は出航前に広東語・福建語・目的地の言語が併記された契約に署名

24）村上，前掲。

25）‘A Chapter on the Coolie Trade’ *Harper’s New Monthly Magazine*, June 1864, Vol. 29.

図３　1864年のハーパーズマガジンの記事



HARPER'S
NEW MONTHLY MAGAZINE.

No. CLXIX.—JUNE, 1864.—Vol. XXIX.

A CHAPTER ON THE COOLIE TRADE.

IN view of one of the greatest problems of the age—the finding an efficient substitute for slave labor—a very brief account of the great experiment termed the "Coolie Trade" may be interesting, in connection with that of the matter which forms the chief subject of the present article. Almost every one has imbibed the indefinite idea of it as a gigantic wrong, in some way involving outrages against human liberty that have called down the opprobrium and legislative denunciation of civilized governments. In the fullest sense this idea is a correct one, but it does not cover the whole truth.

Gigantic outrages have been enacted; but more than this, an old form of slavery has been instituted under a new name, and many a deluded Coolie is to-day under a more hopeless and terrible bondage than the African from the Guinea coast. The plans for substituting a temporary for a life-long servitude have been as varied as the minds of men, and as ancient as the Pyste-

出典　*Harper's New Monthly Magazine,* June 1864, Vol. 29.

しており，さらに，母船に乗船後にも出国の最後の意思確認が行われた。その反面，乗船後の扱いは丁寧には程遠く，裸にされブラシをかけられたり，一部には辮髪をこの時点で切られたりした[26)]。出航後の扱いがひどかったことは高い死亡率に表れている[27)]。水の一杯にも高い値段を要求する例もみられた[28)]。こうした扱いに耐えかねて起った船上の苦力の反乱記録から，苦力が乗船中にも麦わら帽子をもっていたことが確認できる。例えば，1858年のケート・フーパー号の反乱では，中国人苦力たちが寝台のマットから藁を抜き出し，さらに麦わら帽子を積んで山をつくり，それに火をつけたとの記録が残る[29)]。

26）西里喜行. “苦力貿易とロバート・バウン号事件: 福建師範大学におけるシンポジウムへの基調報告.” 琉球大学教育学部紀要 第一部 29 (1986): 92-110..

27）園田節子 “まぼろしのペルー・中国間太平洋横断汽船航路―1878年ペルージア号事件と苦力貿易論議” アメリカ太平洋研究３（2003）: 131-146.

28）西里，前掲。

到着後，苦力たちは，すぐさま大手契約者たちに集団で買い上げられ，労働に従事する場へと連行された。到着時に，勧誘時の約束を守るかの様に，目的地での衣服の第一回目が配られたが，それらは中国風の服や帽子であることが多かった。これらの帽子や「苦力衣」呼ばれるにいたったものは，同じ船か，あるいは似たような行路で香港かマカオから運ばれていたと想定される[30]。

このようなプロセスが背後にあったことを理解すると，雪に包まれた山地で中国人苦力たちが，中国式の服と苦力帽をかぶってたたずむ写真のような光景も，それほど奇異に感じられなくなってくるだろう。（図４）大陸横断鉄道の敷設に２万人もの中国人契約労働者が採用された。おそらく到着してすぐに集団で労働従事場所まで連れてこられ，到着前後に衣服が支給されたため，制服のようにそろった格好をしたと考えられる。就労期間中，中国人労働者たちには一般の商店に行く機会はほとんどなく，契約者と直結した支給所から物資を購入した。

滞在が長引くにしたがって中国人労働者の服装も変化していった。鉄道建設現場の考古学的調査から，金属ボタン，ベルト通し，皮やゴムのブーツの切れ端が見つかっており，アメリカ式のズボンや靴を着用していたことがうかがわれる[31]。中国人苦力たちは，仕事後入浴し中国式の長いシャツと広いつばの麦わら帽子に着替えたとする記録も残る[32]。実際に，工事が完了記念にとられたとされる1869年のある中国人労働者集団の写真で

29）Plowman, Robert J., The Voyage of the “Coolie” Ship Kate Hooper, October 3, 1857–March 26, 1858, Summer 2001, Vol. 33, No. 2 https://www.archives.gov/publications/prologue/2001/summer/coolie-ship-kate-hooper-1.html

30）Sinn, Elizabeth., *Pacific crossing: California gold, Chinese migration, and the making of Hong Kong*. Vol. 1. Hong Kong UP, 2012, 20 and Appendix.

31）Chang, Gordon H., and Shelley Fisher Fishkin, eds. *The Chinese and the Iron Road: Building the Transcontinental Railroad*. Stanford University Press, 2019, 122; Chace, P.G., Evans, W.S. Celestial Sojourners in the High Sierras: The Ethno-Archaeology of Chinese Railroad Workers (1865–1868). *Hist Arch* 49, 27–33 (2015)

32）Chace, P.G., Evans, W.S. Celestial Sojourners in the High Sierras, 28.

図４　雪に覆われた山地で大陸横断鉄道の作業に従事する中国人苦力たち

注：この写真は1863年～9年の大陸横断鉄道建設時に撮影されたと通常解釈されているが，北太平洋鉄道の建設時である1886年に撮影されたものとする説明も一部みられる。
Source: Courtesy of University of Washington Libraries, Special Collections, UW552

は，ほとんど全員が断髪し，オーバーオールにフランネルシャツやセーター，そしてフェルト帽という装いになっている[33)]。（図５）

1870年代，80年代になると清の統制強化とアメリカの中国移民排斥運動の高まりで，それまでに大量の中国人苦力を雇ったペルー，キューバ，アメリカ合衆国への苦力交易が急減した。カナダやオーストラリアや南アなどが引き続き中国人苦力を雇ったが，全体の規模は小さくなっていった。しかし，それとともに中国式の「苦力衣」や「苦力帽」の存在が消え去ったわけではなかった。1900年１月にハワイに到着した最初の沖縄移民の衣服の記録が興味深い。このとき日本内地からの移民にあわせて26人が沖縄からハワイに到着したが，彼らはみな「苦力衣」をもち，それをきて最初は農園で就労した。記録によれば，沖縄からの26人は，ハワイ行の船に横浜で乗り換える際に「中国式のパンツと上着をMorioka移民会社に売りつ

33）雪山にたたずむ苦力たちと同じ集団である可能性もあるが，異なる集団である可能性が高い。

図５　1869年5月10日最後の線路を敷く中国人労働者たちC

注：この写真は大陸横断鉄道の写真記録を残すように任命された Andrew J. Russell (1830-1902)によるものである。
出典：Oakland Museum of California, Wikimedia Commons.

けられ」，また日本の他の地から来た移民は，来る途中で横浜や神戸で「苦力衣」と「苦力帽」を各自購入した[34)]。これらの移民は，一年もたたないうちにチェックシャツにジーンズという「ハワイの他の人たちと同じ服」を着用するようになったという。ここからも，苦力用と峻別された衣類が，香港やマカオのみならず神戸や横浜の中継港でも売られていたことが確認できる。中国人苦力の太平洋交易が縮小しても，東アジアの移民の送り出し地域で，太平洋をわたって屋外労働に従事するときに苦力帽や苦力衣を着用する慣行が成立していたのである。

Ⅱ　中国の製帽業の展開，日本の中国市場進出と苦力帽

1860年代以降の中国の製帽業は，重要産業として研究史上注目されてき

34）Barbara F. Kawakami, *Japanese Immigrant Clothing in Hawaii, 1885-1941* University of Hawaii Press, 1995.

たとはいいがたいが，製帽業がめざましく拡大発展したという見方が一般的である。これに関して，従来，欧米や日本の研究で注目されてきたのは，輸出向けの原料（麦桿）と半加工品（わら帽子）生産が，英仏独米の資本下に，山東，浙江を筆頭にして展開したことであった。加えて，日本の製帽業の輸出工業化と対比された。日本製の麦桿の品質が中国製を上回り，さらに日本は経木や紙など代替繊維も開発しこれらを中国に輸出した他，台湾に投資して模造パナマを発展させ，完成品の輸出へと乗り出した点が強調される。また辛亥革命（1911年12月～1912年２月）が起こり，辮髪が少なくなったあと中国の帽子消費は拡大するという点も通説となっている。これに関しても日本が登場し，一足先に断髪も帽子ブームも経験していた日本は，自分が開発した模造パナマをはじめとする帽子をもって中国市場へ大攻勢をかけたと理解されてる。そして，日本の帽子はある程度浸透したが，二十一か条の要求を受けた反日感情の高まりでボイコット運動が起こり，日本製帽子の消費は伸び悩んだと位置づけられている。

これに対して，本稿はやや異なる視点を打ち出したい。第一に，19世紀後半に中国製帽子の生産は輸出向けだけでなく国内消費用も拡大し，苦力向けの生産がそれにおおいに貢献していたという点である。第二に，辛亥革命前後の日本の中国市場進出は，反日感情が少ない早い段階で不振に陥ったという点である。具体的には，日本の進出は1912年の冬帽子の市場進出では成功しているものの，次の夏帽子の市場進出で不振に陥った。その原因に日本が中国側の夏帽子のドレスコードを理解していなかったことが挙げられる。そこにも苦力用の帽子が与えた影響が介在する。

中国に洋式の麦わら帽が紹介されたのは1850年前後の香港であり，1858～60年に福建で製造が開始した。しかし，1860年後半から70年代にかけて輸出用わら帽子の中心へと急成長したのは，アロー戦争後に寧波が開港された浙江省であった。北方の山東省も同時期に麦桿輸出の中心となった。ここで重要な点は中国においてはこれ以前にも麦や蘭草を繊維とするわら帽子業が展開しており，例えば山東の製造する麦わら帽が暑く湿潤な福建

へと販売されるなど，南北をまたぐ遠隔取引が成立していたことである[35)]。つまり，洋式用とはいえ麦わら帽と麦棹の生産は地元産業と切り離されて展開したわけではなかった。浙江省では輸入布の流入で地元の綿布産業が破壊されたとき，花莫蔍業の屑を利用するという機転を働かせ，製帽業が発達した[36)]。その輸出の伸びは凄まじく，イギリスの領事報告によれば，1877年に1500万個の帽子が輸出された。寧波市はその後1930年代までわら帽子輸出の70～90％を占め続けた。原料調達が地元産のわら素材では追い付かず，経木を日本，台湾，マダカスカルから輸入した。中国側が輸出したのは半加工品であり，輸出先の英仏で，布地や羽や造花でアレンジされたあと，「レッグホーン，パナマ，マニラ帽」として売り出されていたという[37)]。麦藁帽子の生産がすでに展開していた山東でも，イギリス資本に後押しされ煙台から1880～1894年には年平均2500トンの麦棹が輸出された。1898年以降はドイツに占領（貸借）された青島が輸出の中心となり，ヨーロッパ，アメリカ，フィリピンへと輸出を続けた。

こうした目覚ましい輸出展開が注目されるが，同時期，国内向け産業も拡大した。生産は輸出港の周辺からはるか内陸の地域へと確実に拡散していった[38)]。この時，港を離れ内陸地域に広がった産業はむしろ国内消費用であった推測される。著名な旅行家イザベラ・バードは1894年に四川省の小橋・鮮店子付近について，以下のような記述を残し，苦力向けの帽子生産が地域の有力な産業であることを指摘している。

‘The farmhouses in that region were made of mud,［a］thatched roof, and looked poor. Straw plaiting and the making of the very large straw hats, which

35）Lee, Chinyun. ‘The Entry into the World Market of Chinese Straw Braids.’ *Far East/Dálný východ* 6.1 (2016), 20–21.

36）弁納才一『華中農村経済と近代化』，238-248.

37）Allen and Donnithorene, Western Enterprise, 88 Note 1; British Diplomatic and Consular Reports on Trade, No. 5201, Ningpo, 1912, p.10. レッグホーンはイタリア帽の一種。

38）弁納才一，前掲

the coolies wear in summer [*made up*] *the great industries'*.[39]

さらに1910～20年代の調査報告書も，わら帽子が苦力の消費品であることを記している。ファン・ドールンの報告書（1932）は，「麦藁帽子は苦力が購入できるほど廉価となった」と述べ，1920年代の日本の報告書も，浙江省産のわら帽子が廉価で夏に大変便利であるため，中国の肉体労働者を喜ばせており，需要が社会の低層で拡大していると記録している。こうした記述から，遅くとも1890年代には各地の製帽業が生み出すわら帽子が国内の苦力にとっても購入できる商品となっていたことがわかる。ただし資料では「苦力にとっても購入できる商品となった」と，わら帽子の消費が他の層を中心として苦力層へと拡大したかのように書いたが，実際には苦力が消費の中心層であった可能性が高い。苦力以外の層は，とりわけ沿海都市部においては，夏であってもわら帽子をまとわない服装規範がこの期間中に成立していたからである。その筆頭が，苦力の最大の出港地であった香港である。マカオと香港に滞在したドイツ人のルター派宣教師，カール・フリードリッヒ・アウグスト・ギュツラフは，1838年の著作において，「（夏場）はほとんどの人は帽子をかぶらず，扇でさえぎっている。薄く小型のわら帽子をかぶる者も少数いるが，もっぱら労働者だけが大型のわら帽子をかぶる。冬の帽子のほうがずっと多彩で，フェルト製で様々な形がある」と記した[40]。これはアヘン戦争前，つまり苦力交易や洋式帽が導入される前の記述である。この時点でわら帽子を消費する層は，肉体労働者であり，他はかぶっていなかったのである。

75年後の1913年の夏，中国内の製帽産業が相当拡大した後でも，香港の状況は変わらず，むしろ強化していた。在香港日本領事は以下のように記

39）Bird, Isabella. *The Yangtze Valley and Byond: An Account of Journeys in China*. John Murray, 1899, travelled 1894. Chapter XXIII Siao-kiao to Hsieh Tien tze.

40）Karl Friedrich August Gützlaff, *China Opened; Or, A Display of the Topography, History, Customs, Manners, Arts, Manufactures, Commerce, Literature, Religion, Jurisprudence, etc. of the Chinese Empire.* Vol.1. Smith, Elder & Co. 1838, 481.

図６　1910年広東で撮られた苦力と中国一般人の雨具をとったポストカード

Property of Special Collections, University of Washington Libraries. Photo Coll 8

出典：ワシントン大学，特別コレクション

述している。

「支那人向きとして各種帽子の需要を喚起したるは最近のことにかかわり，支那革命後支那人はすべて辮髪を切断したる結果，数か月間は各種帽子の売れ行きは空前絶後の盛況を呈し，価格は二倍三倍に高騰し，当地の在にはもちろん日本におる店さらし品より見本品ごときも含めてとりまとめて売る。…中略（冬帽子がこれだけ売れたのだから夏帽子もと期待して，中国にむけて輸出したが，）…元来当地方のシナ人は冬には上の身分のものから苦力に到るまですべて帽子または傘を使用するが，夏季においては太陽の光線強きに拘わらず，苦力以外は帽子類を使用せず扇を頭上に翳して日中を歩行する習慣あり。これがために，大いに予期せられたる夏帽の需要は実現せられず，価格も著しく下落し，捨て売りするものすくなからず。昨年輸入品の約半数は在荷として本年に持ち越せる状態にして帽子商は冬ものにおいて非常の利益を見たるに反し夏物において輸入は極めて少なし。」

ここにみるように辛亥革命直後の1912年に日本製冬帽子が飛ぶように中国市場で売れたため，翌夏にも期待したが，冬季には全社会層が帽子を

使用するが，夏には苦力以外は帽子を着用しないために，夏帽子の需要が思いのほか拡大しなかったとある。

その後数年間で，日本の夏帽子は模造パナマ帽を中心に，都市部の断髪した男性向けにある程度は広まったが，これも中国式の服や中山服には洋帽が合わないという認識が根強く，拡大していくのに苦戦した[41)]。日本人は洋帽を和装に合わせることに抵抗感を感じなかったが，中国では中山服であっても，ボーターは許容範囲であるものの，パナマ帽は合わないという認識があった。さらにハルビンではロシア人が，山東ではドイツ人がパナマ帽をかぶらず中国人にも流行しないと植民地勢力の影響も領事報告は言及する。上述したように，わら帽子は肉体労働者，ひいては苦力の着用するものという社会的区別にもとづいた服装規範が強化されていたことが、これらの傾向に絡みあっていた。つまり，わら帽子に対する需要は，地方農村を主体とする屋外労働用と，海外と国内の苦力労働者用であり，それらの供給は，中国製が占めつづけた。したがって，1919年に，朝日新聞が「夏帽子をかぶらないやせ我慢」と題して都市部の中国人が夏季に反日ボイコットから冬のフェルト帽子をかぶっているとした批判は妥当ではない。なぜならその前から中国沿岸都市部で肉体労働者以外は，夏帽子をあまりかぶっていなかったからである[42)]。辛亥革命後から中国都市部でもっとも広まったのは，フェルト帽をオールシーズンでかぶることであった。日本も1930年までに輸出の主力をフェルト帽に移した[43)]。

上記のような製帽業の展開をふまえて，1917年～1921年の第一次世界大戦にかかる時期に，中国から英仏へと集団派遣された合計15万人ちかくに

41）日中の装いの比較について，近年，劉玲芳氏が精力的に研究を展開している。劉玲芳『近代日本と中国の装いの交流史』大阪大学出版会，2020年。ただし，帽子についてはあまり言及されていない。

42）胆紅. “五・四運動と日本のジャーナリズム.” 国際公共政策研究 11.2 (2007): 183-194.

43）フェルト帽は中国でも生産がすすみ，高級品はイタリア品が強かったため，日本は低級廉価品部門で，中国製品との競争に苦しんでいた。商工省貿易局『海外市場における本邦輸出帽子および同材料の需給ならびに外国品との競争状況』，商工省貿易局，1-11.

のぼる中国人労働隊（Labor Corps）がかぶった帽子をみよう。アメリカ大陸への中国人苦力の派遣が下火となる19世紀末をこえて，20世紀に入っても苦力帽をかぶる中国人苦力のイメージが，欧米に認識されつづけた。その理由の一つは，次節にみるように，この姿をした肉体労働者の集団が，中国と東南アジアの英領に大集団として存在し続けたためである。しかしもう一つ影響を与えたと考えられるのが，この第一次世界大戦中の中国人労働部隊である。この部隊は，前世紀の苦力に近い装いをしており，世紀をまたいで苦力の姿をつないでいったと考えられる。それではこの部隊がなぜ苦力帽をかぶったのかを以下にみよう。

この労働隊は，山東の権益をとりもどそうと，中国が英仏政府などと正式に契約して派遣したもので，その意味では強制移住労働者とはいいがたい[44]。しかし，給料が低く，戦場の荷役労働や武器工場での肉体労働に従事した点と，のちの満州における苦力の最大の供給地であった山東省から労働力が提供された点で，苦力と重なり合う。さらにこの中国人労働隊は，戦場にあって，非戦闘部隊であることを一目で理解させる目的で，中国式の作業服を夏も冬も着用し，識別しやすい，苦力帽に類似したわら帽子をかぶった。これらの衣類は，中国本土でほとんど供給された。

山東の労働隊の採用場で新規採用者の身体検査をしたカナダ人医師がとった撮影した写真から，検査を待つ中国人たちが多彩な形のわら帽子をかぶっているのが確認できる。（図７）医療検査を合格すると，経由地のヴァンクーバー行に乗船する前に，濃紺の中国式作業着の上下と，「CLC（Chinese Labor Corpsの略）」と記載された帯が縫い付けられたわら帽子か，わら帽子用の帯だけが支給された[45]。（図８） この姿で，大半の中国人労働隊がヴァンクーバーを経由して，ベルギー，フランスの戦場に送ら

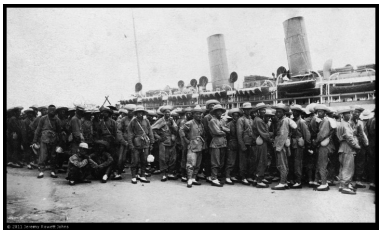
44）フランスが採用したのは37,000～50,000人，イギリスは945,00人と推計される。中国の他にもポーランドも似たような意図で労働隊を派遣している。

45）Ma, Suzanne. “Chinese recruited for war had secret passage through Canada.” *CTV News*, Bell Media, 11 Nov. 2011, http://www.ctvnews.ca/chinese-recruited-for-war-had-secret-passage-through-canada-1.723974. 2020年８月閲覧.

れた。

中国人労働隊は，この中国製の帽子をヨーロッパで作業する間もかぶり続けた。図９はイギリスの武器工場で働く中国人労働隊を撮影したものであるが，室内で，おそらく夏場ではないにもかかわらず，多くが円錐形の帽子をかぶっている。その一方で長い派遣期間中に,「山東帽」と呼ばれた新しい専用帽子も誕生した。これは，毛皮の耳隠しと縁取りのついた茶色

図７，図８　第一次世界大戦来における中国人労働隊



出典：Ma Suzanne（2011）

図９　イギリスの工場で作業する中国人労働隊

出典：Wikimedia Commons[46)]

46）The Surprisingly Important Role China Played in WWI | History | Smithsonian Magazineも参照。

のフェルト帽であって，大戦前に中国北東に駐屯したイギリス兵がかぶった帽子をモデルとしたものであった[47]。山東人にとっては，中国人不熟練労働者がイギリスの植民者がかぶった帽子に近いものをかぶることは想定しにくいことであったとおもうが，中国人労働隊はそうしたタブーも超えていった。ヨーロッパ側に到着したあと，中国人労働隊は中国で支給されたわら帽子や布帽子を使い続ける一方で，「オーストラリア式ブッシュ•ハット，フランス軍隊式ケピ帽，鉄ヘルメット」にいたるまで，多種多彩な帽子を新たに入手し，かぶっていた[48]。戦場で入手できるかぎりのものは何でも使用したのであろうが，大洋をわたり働いた若者たちの姿勢がかいまみえるようなエピソードである。

このように1870年代から1920年代までの中国の製帽業の拡大をみたときに，苦力帽は周縁というより主要な一部をなし，この期間にもおおいに生産を拡大し，国内消費の拡大において大きな役割を果たしていた。しかし，その一方で，苦力に対して自らを区別するために他の都市社会層がわら帽子をかぶらなかったことが，消費動向を決定づけた。

Ⅲ　東南アジアの製帽業との関係性　1880年〜1940年

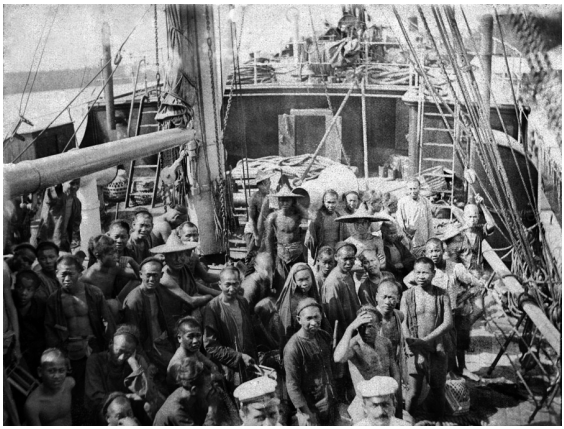
最後に，東南アジアの状況をみる。東南アジアは，古くから中国人移民の移動先であったが，1870年代末以降太平洋をわたる中国人苦力が減ったことで主要派遣地となり，1930年代まで中国人労働者が大量に移動しつづけた。1885年以降，香港から出航した年４〜７万人移民のうち，７〜８割の行き先が英領マラヤであった[49]。汽船の発展も移動を促進した。図10は1900年ごろにシンガポールへ向かう苦力たちの船上写真である。ここでも

47）Fawcett, Brian C. ‘The Chinese labour corps in France 1917–1921.’ *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society* 40 (2000): 33-111.
48）Suzanne Ma, Chinese recruited for war.
49）可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』，58-69.

苦力帽がみられる。この大量移出を反映して，中国は1870～1940年の間，東南アジアにわら帽子を輸出し続けた。この期間，苦力帽と呼ばれる帽子が，現地の帽子とは区別されて存在し続けたのである。

英領マラヤに1940年～1950年代に滞在し，ラッフルズ博物館の館長にもなった，医者／鳥類学者／民俗学者のカール・アレクサンダー・ギブソンヒルは，滞在中に中国人労働者たちが英領マラヤでかぶった帽子を，各地の帽子と比較しながら歴史的に検証した[50]。それに拠ると，苦力がマラヤでかぶった帽子は，初期には苦力の出身地である広東・海南・福建の各地の様式を反映して，頂点の円錐の形や編み方が異なっていたが，時期をくだると，ほとんどが香港から輸出され，似たような形になっていったという[51]。（図11）さらに，ギブソン•ヒルは，苦力帽原料となる素材が英領マラヤにも豊富に存在するにもかかわらず，英領マラヤでは似た形の帽子を

図10　シンガポールにむかう中国人労働者の船上の図



出典：An album of rare photos: From Chinese coolies to Singaporeans, History News - ThinkChina

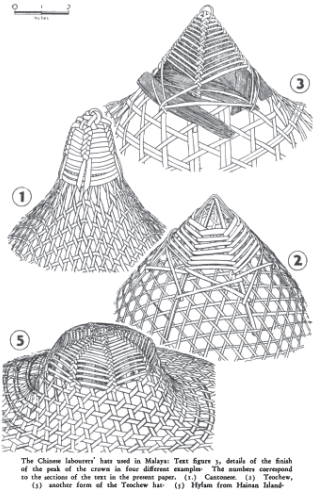
50）Carl Alexander Gibson-Hill,. “The Chinese Labourers’ Hats Used in Malaya.” *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 25.1 (158 (1952): 35-47

51）Gibson-Hill, The Chinese Labourers’ Hats.

製造しようとする試みはなされなかったと言い切り，その背後には「社会的な区別（Social distinction）」が働いていたことを示唆した。

この社会的区別とは，中国人が大半を占めるシンガポール社会においてもっとも顕著であった,「苦力と奉公人」と「それ以外」の間の区別と考えられる。1923年にアメリカ商務省の英領マラヤのハンドブックをまとめた商務官ジョン•ファウラーは，マラヤ社会の男性の社会的区分を，「典型的なわら帽子」をまとう苦力と「ヨーロッパ人，混血（half-castes），苦力や奉公人より上の層に属する中国人」とに分け，後者は日中，ヘルメット帽（sola topee/sun helmets）か中折れフェルト帽をかぶり，帽子によってこの社会区分が識別できると述べた[52)]。このように，英領マラヤ社会には，前節でみた香港同様に，苦力以外はわら帽子をかぶらないという強いドレスコードが成立していた。

図11　マラヤにおける中国人労働者の帽子



The Chinese labourers' hats used in Malaya: Text figure 3, details of the finish of the peak of the crown in four different examples. The numbers correspond to the sections of the text in the present paper. (1.) Cantonese. (2) Teochew, (3) another form of the Teochew hat. (5) Hylam from Hainan Island.

出典：（Gibson Hill 1952）

52）John A. Fowler. *Netherlands East Indies and British Malaya: A Commercial and Industrial Handbook*, United States. Bureau of Foreign and Domestic Commerce.1923

一八九〇年代に行われたシンガポールの人力車引きの苦力たちの服装統制も，苦力たちが苦力帽で識別されつづけることに一役買った。これは，上半身裸であることが普通であった人力車苦力に対してきちんと着装することを促すもので，伝統的な苦力の装いであるわら帽子と青色の半ズボンか黒色のだぶだぶとした長ズボンに上衣を着用することが一九一四年ごろまでに浸透した。クアラルンプールの高等学校校長であったイギリス人リチャード・シドニーは，1926年に記したルポ「Malay Land」の中でシンガポールの人力車苦力の帽子について,「たいていバスケット帽でかなり幅広のつばがあり真ん中で円錐形になっていた」と述べており，苦力帽の形が継続していることが確認できる。しかし同時に「しばらく観察していると，わら帽子の形状は多彩であり,（大半がわら帽子であっても）ぼろぼろのフェルト帽子や日本製麦わら帽子をかぶる者もおり，かぶられる帽子は多彩であった」とも述べている[53)]。人力車苦力経験者も，インタビューで苦力はわら帽子を着用することが義務付けられたと証言を残した[54)]。

英領マラヤやそのほかの東南アジア植民地都市社会において，わら帽子よりもヘルメット帽が好まれた理由は，従来，熱帯気候の強い日射にわら帽子が耐えられないことから説明されてきた。その一方で，東南アジア全体には多彩なわら帽子文化があり，この時期にまさにマニラ帽，蘭領東インドの竹帽やパンダン帽，さらに台湾と日本の林投・紙素材の模造パナマと，国際的なヒットを起こした夏帽子商品が生み出されていた[55)]。それらの中継交易地点となりながら，夏帽子が当の英領マラヤ社会ではあまり着用されなかったことは，苦力と苦力以外の社会的区別なくしては説明できない。日本側の帽子輸出業者は，模造パナマ帽が，安価でファッショナブルな商品として広くアジアの新興都市中間層に受けると信じて疑っていな

53）RHJ Sydney, Malay Land (London: Cecil Palmer, 1926)

54）Warren, James Francis. *Rickshaw coolie: A people's history of Singapore, 1880-1940*. NUS Press, 2003.

55）Fowler, John A. *Netherlands East Indies and British Malaya*

図 12　1935年に使用されたシンガポール人力車苦力の絵葉書

出典：シンガポール国立文書館　19980005754-0041

かったが，シンガポールでは「模造パナマ帽は，夜間しか，さらに苦力以上階層に属する中国人の一部しかかぶらず」，その後も模造パナマ帽の輸出が伸びていかないことを嘆いた[56]。

一方，中国製の帽子の東南アジアに向けた輸出は1930年代まで堅調であり続けた。東南アジアで，この期間，上述したように英領マラヤ除く地域では様々な輸出用の帽子が製造された。また香港やシンガポールを中継点として，欧米，中国，台湾，日本からの帽子が東南アジアに流入した。1932年のアメリカ商務省の領事報告では，タイの廉価な夏帽子事情を詳しく取り上げている[57]。そこには，タイでは，輸入夏帽子がきわめて安価であり，蘭領東インド，日本，中国から流入し，種類に富むと述べられている。その中で一番，二番人気であったのは，英領マラヤ連邦と同じようにフェルト帽とヘルメット帽であった。この両品については，上級品をイタリアとイギリスが，低級品を日本や中国が供給していた。しかし，それらに次い

56）黒谷了太郎編『林投帽 製造業調査 』台湾殖産興業局，1915年

57）US. Department of Commerce, Consular and Trade Reports, Department of Commerce and Labor, Bureau of Manufactures, 1932, 221.

で三番目の重要輸入品として，タイで働く「中国人労働者の間で主に使用される」幅広のつばの「苦力帽」が挙げられている[58]。このように東南アジア全域で働く中国人労働者をめがけて，中国は帽子を輸出しつづけていた。

一九三〇年代後半以降，日本の東南アジアと中国への侵略が進んだことによって，以上のような苦力の流れも，東南アジアにおける多彩な帽子の生産と消費も停止された。日本の侵略は，少なくともマニラ帽，蘭領東インドの竹帽・パンダン帽，そして山東の帽子生産をほぼ停止させたと記録に残る。日本は自らの権益を伸ばすために「中国人苦力」を使い，それらの東南アジアへの移送を禁止した。山東から満州にむけて一九二〇年代から中国人労働者が大量に送られ苦力と呼ばれていたが，その流れはこれによって一層強化され，数が増えていった。

それとともに日本は積極的に日本製の帽子を売り込もうとした。日本人の目には，中国人やマラヤの人々が日本製の帽子を拒否することは，ヨーロッパの植民地諸力へ迎合と映った。東亜共栄圏の提唱と同じくして，新生の台湾帽がアジアの帽子として提唱された[59]。この帽子は，ポスターの示すように，模造パナマ帽と中折れフェルト帽とヘルメットを融合したような形状をしていた。（図13）

満州において，日本人は，頭から靴の先までフルに洋装をし，いつも帽子をかぶっていると評された。対照的にその下で働く山東苦力は無帽であったが，厳しい寒さに対し幾重にもボロを重ねていることが特徴であった。このようにして，苦力帽の着用はなくなっても，苦力と，苦力以外の人々との社会的な区別は明確であり続けたのであった。

58）タイの地元で生産されるのは，警察や軍隊用の制帽，学生用の安価な水兵つばのわら帽子で，この両者も輸入品があった。

59）洪郁如. “彼女たちの「日本時代」：植民地台湾の製帽業にみられるジェンダー・階層・帝国.” 言語文化= *Cultura philologica* 55 (2018): 35-53. 小池金之助.『台湾帽子の話』，台湾帽子同業組合聯合会，21，1943年。

図13　台湾帽子の宣伝ポスター

出典：小池金之助『台湾帽子の話』1943

おわりに

帽子が歴史の主役になることはあまりない。しかし19世紀末から第二次世界大戦までの帽子ブームは際立ってグローバルな現象であり，東アジア，東南アジア，南米に他の産業をさきがけて世界的な輸出産業を創出する機会を与え，またそれらの地域の消費者にも多彩な帽子が広がっていた。従来，この帽子産業と消費の展開と，世界各地に労働移住した中国人労働者―中国人苦力と総称された人々―とは結びつけられてこなかった。本稿の目的は，冒頭で述べたように，広範な移動先で労働者の多くが，写真や絵葉書の示すように先が円錐形でつばが広い特徴的な形状のわら帽子を実際にかぶっていたとしたら，その供給を可能にしていた仕組みを明らかにし，またそれらの苦力帽が他の帽子の生産や消費に与えた影響を考察することであった。それらを通して強制移住労働者の「強制」の意味と影響を考え，強制的な移動が人々の社会関係をどのように変容させ，さらに移動先の国家・社会にいかなる変容を迫るのかを明らかにしていくことにつなげたい

と考えた。

本稿では，まず第一節で，中国人苦力について，強制移動であるがゆえに，出航地でも行先地でも移動の管理統制が厳しかったことが，統一された帽子をまとわせるきっかけとなったことを示した。一方で，第二節や第三節では，その帽子が中国本土や英領マラヤ連邦で世紀をまたいで20世紀にも継続的に使用された要因を，苦力とそれ以外の間に社会的な区別を示すドレスコード（服装規範）が生まれ，それが持続していたことに求めた。苦力の主要出航地の一つである香港，行先である東南アジア，そして第一次世界大戦中に中国人労働隊を受け入れたイギリスやフランスの戦地では，いずれも事情は少しずつ異なっていても，その場合の苦力と，苦力以外とを区別する必要が生じており，そのことが中国人労働者に苦力帽をかぶらせつづけることにつながっていた。同時に，中国では製帽業が，国内外の苦力の需要と結びついて展開しており，苦力帽の供給者は一貫して中国であったことを示した。中国人苦力の展開とその帽子の着用が，中国の帽子産業と消費のありかたを方向づけたといえる。日本は，苦力帽のもたらした影響を把握しないまま夏帽子を売ろうとして失敗した。この例からみられるように，苦力帽の展開は，中国や東南アジアの帽子市場へ進出しようとした諸地域にも影響を与えた。

ここから導きだされる強制移住労働者の「強制」の意味とはどのようなものであろうか。第一に，逆説的ではあるが，この事例から，自由や自発性に基づいた行動―例えば「自由な」労働を行う者の自発的な消費―からしか変容しないと考えられる傾向が強い消費財の生産動向や消費パターンも，強制移住労働者の多分に非自発的である消費・購入によっても変わりうるということを示せたと考える。

第二に，この事例があらためて示すのは，強制移動が生み出す社会的作用の強さである。中国人苦力と呼ばれた労働者集団は契約労働で，場と時期によって強制性も様々であった。しかし，それにもかかわらず，遠く大洋を超えて集団で連行されるようにしてわたってきた，あるいはわたる存

在であるということは強制性をあらわし，そうではない人々に区別しようとする強い動機を生み出し，それを反映したドレスコードを成立させていった。このことが一世紀にもわたって，中国人苦力の装いを実体の上でも表象の上でも越境的につなげていく土台となっていた。

もっとも本論文では，中国人苦力やその周囲の人々が，そうした社会的区別をどのように体験したのかを追うことはできなかった。また，この論文では中国人苦力帽の実体を追うことを目的としたため，イメージや図像がどのように流通し派生展開したのかを追究できなかった。今後の課題としたい。

Global Distribution of Coolies Hats, c. 1870-1940

Miki SUGIURA

《Abstract》

Described in this paper is the global circulation of Chinese coolies' hats between 1840-1940. The mechanism by which indentured laborers' clothing was disseminated beyond borders is explored in association with the rise and expansion of the hat industry in East Asia. This exploration sheds light upon the impact social segregation had on consumption patterns. In the first part of this paper, an overview of the historiography of Chinese coolies is provided. Following that, firstly the passage of coolies' hats to the Americas in 1840s-1880s is explained. The expansion of the Chinese hat industry and the impact coolies' hats had on its market orientation is then illustrated. Finally, the focus is placed on British Malaya and Southeast Asia between 1880-1940, and the connection between social segregation and the hat market in the area is addressed.